

秋来めと 目にはさやかに・・・

じりじりと照り付ける太陽のせいだろうか、庭の風景が白っぽく見える。¹⁴歳の夏、

ボクは広縁に置かれた籐椅子に身を委ね、谷崎潤一郎の文庫本を読んでいた。油蝉の鳴き声が暑さを際立たせるのだが、噴き出す汗をぬぐいもせず、耽美派と呼ばれた文豪の代表作「痴人の愛」にのめりこんでいたのだ。

背後に人の気配を感じ振り返ると、よく熟れたスイカを皿に乗せた若い女性が立っている。慌てて閉じた本のタイトルを一瞥した彼女は、ボクをからかうように言った。中
学生のくせにそんなの読んでいるんだ。

向かいの籐椅子に腰かけた彼女とスイカを食べていると、「痴人の愛」のヒロインが目の前に現れたようで、ボクは少なからず動揺した。すると突然爽やかな風が吹き込み、彼女の頬を優しく撫でた。風がやむと、彼女は夏空を眺めながら歌うように口を開いた。

秋来めと目にはさやかに
見えねども風の音にぞ驚かれ
ぬる

ねえこの和歌知ってる？
古今集よ。残暑の中で吹いた
風に秋の気配を感じる。日本
人の感性って繊細で素晴らし
いでしょ。谷崎もいいけど日
本の古典や和歌もいいわよ。

半世紀以上前の夏、青年期の
門口に立っていた私は、年
上の女性からこの和歌を教わ
った。以来立秋を過ぎるとこ
の歌を想い出すのだが、今年
は酷暑のせいりで、最近になっ
てやっと秋を感じるようになって
った。それにしても心に浸み
る素敵な歌である。

なお、前述のシーンは、思
春期の少年の体験をベースに、
妄想が創り上げた白昼夢であ
ることをお断りしておく。